

国家 ― 覚え書・そのろ ―

部族・民族・宗教について

三 浦 精 一

第55号（七月号）で外婚制について書いた。けれどもこれは模式的に外婚制をとっている部族のことで、こうした制度がすべての部族や民族に共通に存在したということでも、また存在するというでもない。平行いとこ（パラレル・カズン）の結婚をタブーとする多くの部族が現存しているということで、部族によってはこうしたタブーを持たないものもあるのである。

いずれにせよ血縁の近さが問題なのではなく、いつの頃からそれが制度として固定し維持されているので、こうした固定によってその社会がささえられて来たのである。その社会が、こうした制度を他の幾つかの制度と組合わせた機構を持っているということである。制度がつくられ、構造が形成されるということは一つの固定とも見られ、人間の自由な感情や本能にとって束縛ともなる。

しかしこうした社会の中で生れて育つということは、そうした束縛を束縛とも感じないで成長して行くことを意

味する。それを当然のように結婚し、老人となり、祖先となつて行く。それが束縛と感ぜられるのは、そうした慣習やタブーを越した恋愛が生じた場合で、それは本人にとつても、コミュニティにとつても一つの危機である。こうした危機を脱して他の部族の中への逃亡も行われる。

このような危機にそなえて部族の中にはいろいろな通過儀礼などが行われ少年期から成年期に通過するためには厳格な訓練や教育が行われている。儀礼を通過した者は、その部族の慣習、制度、宗教などに習熟している。

×

ある部族は思春期に達した青年男女が一つの若者小屋で共同生活をしながら、自由な性交を楽しむことを認めてはいるが、結婚は別で、この時好き合った者同志という訳に行かず、別な規制に従がう。一見奇妙に見えるこうした規制が何故かとは問われない。過去からそうだったし、祖先もそれに従つて来たのである。そしてその祖先は部族の中に座を持ち、皆が祖先と共に生きている。コミュニティは生きている者たちだけのものではない。こうした慣習が生れてから、否、生れる前から、空気のように、その部族、そのコミュニティを包んで来た。通過儀礼を受ける時まで、こうした部族の過去からのもの

のを学んで一人前になる。日本でもチョンマゲが男の誇りだったのは百年前までである。少年時代の前髪を落して元服して一人前になった。明治はこうしたものを革命した。

×

毛沢東が呼号する文化大革命は、民衆の中に深く根を張って、地方性とも結びついていて反政府的な、むしろ無政府的なシナ民衆の数千年の体質への挑戦である。「放つといってくれ。おれたちはおれたちで何とかやって行くんだ」という民衆を中央集権的に改編しようとしているのだ。清朝は弁髪と満州服を強制した。初め血を流して反抗した民衆も結局弁髪するに至った。そして採用した満州服が今のシナ服である。中華民国となって弁髪を切らせるのにまた流血を見た。地方に行くときでもめずらしい弁髪を見ることがある。習俗となったものを変えることは容易ではない。清朝三百年の年月は弁髪と満州服を定着させた。毛沢東は日本の戦時中の国民服のような中共服を強制してはいないが、官僚服を好まない民衆が満州服をすててこれに代える日があるだろうか。革命は決して天降りのものでないことはシナの幾多の王朝の変遷もシナ民衆の体質をどうすることもできなかったことでも分る。表面的な服装の変改はできても、それは決して

て革命ではない。強要された満州服に変化を与えて美しいものにするところに民衆の創造性と革命への志向を見ねばならない。ロシアの民衆は決して政治を語らない。民主主義に欺瞞され、投票して政治に参与した気になる民衆くらい統御しやすい国民はないだろう。

×

性の結びつきはもと生物学的次元のものであり、結婚は人間の社会におけるものである。社会生活が人間の群居性にもとづくものであるにせよ、それをささえているのは、蟻や蜂におけるような本能だけによるのではない。性的結合という生物的事実の周辺に結婚という形式化による家族と家族の結びつき、族内婚、族外婚、タブーなどによる氏族や部族の形成など複雑にからみ合っていてきているのが、コミュニティーであり社会である。

蟻や蜂のように本能による社会形成が出来たら、族外婚やインセストのタブーも、善もなければ悪もなく、宗教も反逆も革命もなく社会は至って平和なはずである。自然に帰れと叫ぶ人たちは、こんな社会を考えているのだろうか。自然とは一体何を意味するのか。

ヨーロッパのバルチック琥珀の中に化石となっている蟻や蜂は約三千万年も前のものと推定されているが、研究によれば、その社会生活も、その蟻が持っている寄生

虫も、現在の蟻と全く違っていないという。三千万年の平和と言うべきだろう。

人類の出現はこれに比べると約百万年前である。この短かい百万年の間に人類はまかり間違つて言葉を取得し、手を歩行から解放した。言葉がコミュニケーションのためだけだったら、動物からの一歩前進というだけだが、論理的に構成されたこの言葉で論理的に判断し、理性が人格の要素となった。自由が追及され、平等が願望され、美醜が識別される。しかし感情がそれを貫ぬいて、好き嫌いをどうすることもできない。才能や情緒は不平等だが、人間として存在するということは、あらゆる不平等を超えて平等な権利である。知識や評価を超えて本能的と言うよりも、本来の本性として、精神薄弱児をも、肢体不自由児をも、生き抜かせようとする。これを愛と呼んでいる。集団動物として愛は集団的生命とも言うべきものである。しかし人間の場合、知性による個の認識を通じて自己愛にもつらなり、生物としての個の性を通じての集団的生命の維持ともなっている。この集団的生命が集団形成によって行われる場合、人間においては知性による理性的処理や、制度や宗教の組織化が行われる。さらにこうした組織による個の抑圧、反逆、革命という現象を伴うのが人間の社会である。

この社会こそ人間にとつての自然ではないか。デュルケムは神は社会だと言っている。若い日、唯物論にふれて神を否定し、キリスト教に叛いた私の空白に、新しい光明を与えてくれたのはこのデュルケムの言葉だった。社会は生きている。人間とともに百万年を生きた。生きるということは動くことだ。生命は動だ。ここに石川さんのディナミックがある。動はリズムをもつ。人間の生命、個の生命の有限を反映するのだろうか。初めにリズムがあったと言った人がある。初めにタートがあったと言った人もいる。聖書は初めにロゴスがあったと言う。動から動へ。その間に束の間の静がある。はかない静だ。しかしそれを求めないではいられない。そして新しい動へ。しかし私はやがて死ぬ。死は固定した静だろうか。生きている限り静は固定ではない。木は静まろうとしても風はやまない。すべてが動いている。しかし一時的にもせよ安定が願われる。そこに静があるのだが、この静は常に動を含んでいる。生きているのだ。こうしたやすらぎの間に個は考える。そして新しい動へ。だが人間のつくる組織や制度は一つの有形、一つの具体としての固定的な姿をとる。これに安住したい者はその固定的なものの永続を願う。一時的な静態でしかない安定の永続を願うのだ。蜂や蟻のような三千万年の平和への祈り、

固定化への願いと言うべきだろう。安定や常住の平和を求めるのも無常の世界であるからこそである。人間が知性を持ち、理性をもつ以上、自由を求め、平等を期して固定化を打破しようとする。これが革命ではないか。キリストは言った。「私が地上に平和をもって来たと思ってはならない。平和ではなく剣をもって来た。つまり、私は息子をその父から、娘をその母から、嫁をその姑から分れさせるために来た」と。それでも平和は願わしいのである。「平和を求める者は幸である」とも言っている。分析し、総合し、抽象する人間の次元は、常に本能の周辺で固定する生物的次元と交錯する。ここに一人の個人においてすら、固定化との相剋はまぬかれない。集団の中でも、集団と集団との間でも、社会の中でも、こうした相剋はまぬかれない。保守的な本能はいつでも固定した組織や制度を要求する。

こうしたことはすべての人間に共通して言われることだが、こうしたことをわれわれの社会でどのように表現するかということには大きな問題がある。というのは、われわれはフランス革命以後「法」というものに、あまりにも強く縛られ、あるいはそれを楯に自分が守れるような幻想をもっていることである。フランス革命の時代に、多くの庶民は「法のもとでの自由」「法のもとでの

平等」という言葉に幻惑されて血を流して自由を、そして平等を実現しようとした。しかしそれに便乗して成立した政府から与えられたものは一体どんな自由、どんな平等であったか。経済的自由の名のもとにブルジョアは富を独占し、雇傭の自由の名のもとに労働者は職を得られなくなり、政府の官僚階級は法のもとに身分を保証された。階級とはマルクスの言うような生産手段の所有者と非所有者とによって分けられるだけではない。官僚や閥を形成している者たちの階級が如何に強大なものであるかを知らねばならない。日本の共産党その他に存在すると言われる東大閥、学界や出版界を支配する学閥などを考えても分る。福沢先生は「官僚は孫子の代まで親の仇」と言い、石川さんもかつて「官僚主義との戦」を語った。

維新後の日本で法律をつくって守って来たのは一体誰の利益だったか。ロシアやシナの官僚制は一体誰を守っているのか。アルジェリアの独立を獲得したベン・ベラは大統領になった。しかし彼は護衛もつけず民衆の中に入って行き、誰とでも話し、道で孤児や老人に会えば、その希望する必要な処置をとってやり、サッカー場に行けば門を自分で開いて皆を入れてやった。住む家が無いとベン・ベラの所に行けば、すぐアパートの鍵をくれた

と言われている。その彼は「ベン・ベラは大衆の気持を知っていたが、演説するだけで実際には何も仕事をしなかった」と言われ一九六二年にブーメデクエン大佐のクーデターで失脚し、今はどうしているか私は知らない。民衆は彼の記憶をなつかしんでいるという。しかしそのベン・ベラも自分のそのやり方で決してやっていけないことを知っていた。国境紛争に出兵して大衆をゴマカスこともしている。大隈重信も内政の失敗をゴマカスために軍部と結託して山東省に出兵して青島を占領した。中華民国は国恥記念日を制定した。

ブーメディエンはベン・ベラを追っ払って官僚機構を整備した。十月革命後のレーニンもクレムリン宮殿の奥深く厳重な護衛のもとにソヴィエト官僚機構を支配した。何かの行事に現われて難壇に列ぶソヴィエト官僚や中共官僚、その順位で政権序列を占う新聞記者、見よ、彼等は皇帝たちにも等しい雲の上の存在ではないか。民衆から離れた存在で雲の上から官僚を通して支配しているのだ。これが政府である。これが官僚政治である。革命とは政府や政権の交替以外の何なのだ。民衆の求めるものは決して、こうした漢字が表現する「天の命を革める」という意味の革命ではないのだ。こうしたものをこそ組織による革命だろうが、民衆は組織を求めはしない。

レヴォリューションを、民衆の中にすべてを巻きこんで国家も政府も組織も、その中に消滅させることを求めるのだ。

も少し官僚機構について書こう。明治、大正、昭和にかけて根津財閥を築き上げた根津嘉一郎は、その初め資金を調達するために郷里の山梨で石油入りの缶を抵当として積み上げ、仕事が図に当って返金に帰って来て、缶を受取るとその中味を、そこらに流した。驚いて見れば、それは水だったという。こうした人を食った根津とは別に、今の富士銀行、昔の安田銀行をつくり上げた安田善次郎は入って来た金銭をなでさすって又帰って来いよと言ったと言われる。彼等のこうした金銭愛だけで財閥も銀行も出来はしない。彼等は組織の機能を知っていた。当時の帝大出の学士様がその組織をつくった。彼等はこうした組織づくりに金を出し惜しみしなかった。三菱造船はその機溝を当時の海軍の機構に合わせてつくり、尉官階級が来れば係長や課長、佐官階級には課長や部長、将官階級には部長や重役といった対応の仕方で建艦の交渉をしたと言われている。官僚と階層組織、これは単に政府だけのことではない。根津が来社するときエレベーターの前に課長たちが整列して迎えていた。早稲田の運動会に大隈が行けば御来臨という声がかかった。組織が

できるといふことと、その階層化、官僚化といふことはこれまで当然のように考えられて来た。労働組合にもこの弊は見られる。まして政党においておやだ。政党は政権を目指している。政治権力は階層制、官僚制なくして存在し得ないのだ。それを否定しないまでも、その枠組を越えたらベン・ベラの運命が待っているのである。諸君は毛沢東が民衆の中に入って行つてベン・ベラのような行動をしようと思ふことができるだろうか。民衆からはなれた雲の上の存在がつくる命令や法律で民衆は救われるのだろうか。

諸君をとり巻くこのような「法」の世界で生れ育つた諸君は、何かの組織をつくれれば、すぐ細部にわたる規定をつくらうとする。学生団体や労働組合ならば、ある程度の規則も必要だろう。しかしアナリストの場合、会費や集会や会報などの規約以外にどうして除名規定が必要なのだろう。昨日まで同志と呼んだ者を何の権力によって裁判しなければならぬのか。僕等の仲間には若い者も多いし、若い者がどうかして逸脱した時に何故に除名しなければならぬのか。去って行くならば去つてもいい。スパイは忠実に規定を守り、行動においては勇敢でさえもあるだろう。そうしなければスパイ出来ないので。フランスのサンジカリストの仲間で立派な同志とし

て死に、皆が墓まで建てた男がスパイ行為をしていたことが後に官憲の書類で分つた例もある。同志が敵に見える時は、もうその運動は末路である。除名騒ぎや内ゲバにつけこむのは政府だ。それによって一網打尽にできるのだ。信頼と愛情によってささえられるのがわれわれの運動であるはずだ。規約や法によってではないのだ。除名規定などでスパイを保護して同志を追放するような愚をしてはならない。またその規定によって官僚主義化してもならないのだ。法規から一步も出まいとするのが官僚ではないか。

×

西アフリカやコンゴで裁判事件が起つたとき、部族の長老たちによって法廷が開かれる。クランの成員同志のけんかは流血ぎたにならない範囲で自分たちで解決できさえすれば長老は介入しない。それがくすぶり続けて宿怨闘争になりそうな時に長老たちの前に持出される。最大の強制力は各人の内部から出る。各人とも祖先——皆が共存し続けて行くことを願う祖先に叛くまいとする。だから警察制度の話をして無理解できない。そんな制度を採用することは侮辱でしかない。

あるとき、ニワトリを盗んで訴えられた者があつた。裁判官はそのBに何故Aのものを盗んだかを聞く。Aが

自分の妻にいちやつのを見たような気がすると言ふ。実際に見たかも知れないが、そうは言わない。皆の噂になつていとも言わない。裁判官はAに事実かと聞く。そしてイエスと答えて、Bの家族のメンバーに対する昔の遺恨をもち出す。そうするとその答によつてたくさんの人たちが呼び出されることになる。裁判が長びく。長びいている間にAもBも、自分たちの行為が人々の前に知られていて、もう二度とそんな行為はできないことを悟る。そして裁判官はこの二つの家族の間に良い感情をとり戻さねばならない。Aに対して、Bに山羊一頭を支払えという。Aはニワトリ一羽の代償の高さにショげるが、裁判官はBに山羊を一人で食べるのは多過ぎるからAと食べよ、そしてBの家族はAが恨むようなことをしたのだからビールをやれという。そしてAの方には受けたビールはBと一緒に飲めと命ずる。結局ニワトリ一羽を取戻せば済むと、われわれならば考える裁判が、そんな眼には眼、齒には齒といった形式とは別の「友情の回復」といふことで終る。

ある裁判は歌を歌つて、その歌の優劣で勝敗が定められる。本件の正邪は裁判官にも、本人にも、歌を聞く人たちにも、もう分つているのだ。歌のなかで相手を非難し過ぎて、その盗んだことで罰を受けたとしても、両

者の間に存在している傷はいやされることはない。そうしたことは忘れて歌の優劣に皆の注意が向けられれば、歌が下手で敗れたつて恨みに残らない。祖先は皆が恨みを持ち合つて生きることを望まない。それは滅亡につながる。ヨーロッパ式の法観念とは異つたものがある。日本の大岡裁判の三方一両損というのもこれに似たものと言えよう。

これはアフリカの西部のコンゴ地域で、部族の生活を探つたタインブルによるものである。アフリカの一部にはこのように生活しつつ王も警察も軍隊を持たずに生きて来た幾つかの部族があつて人類学者の注意をひいている。ヨーロッパ人はこうした人たちに政府や軍隊や警察、そして法律つくらせ、貨幣制を採用させて近代国家という形式を与えようとしている。こうしたものもヨーロッパ文化の一要素にちがいないが、生活に便宜をあたえて、強制しなくても流通するものとは違う。日本の明治維新後がそうであつたように、ヨーロッパ的価値観への切換を要求するものである。価値観の切換が必ずしも進歩ではない。

部族愛、民族愛、相互扶助、相互共存を中心とした何千年の生活を、たとえそれが物質的に貧しい生活であつても、それを、人を見たら泥棒と思へ、眼には眼、齒に

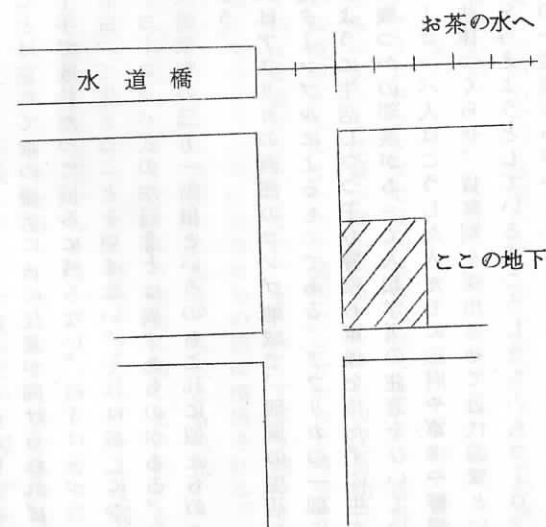
は齒といった相互不信を基礎として冷酷に法を適用しようとする不毛な沙漠的生活におきかえて、一体進歩と言えるのだろうか。

×
何千年のこうした生活は沈澱とも固定とも見られるであらう。しかしそれは前に言った「静」の相であって、その中に生命を、一つの動となつて現われるもの、固定を破る生命を見ねばならない。

×
権力もまた固定である。暴力的、階層的、官僚主義的固定である。警察と軍隊によつてこの固定を守る組織的固定化である。生命を圧殺する固定化である。国家の枠組の中で、たぐさんの法律をあとからあとからつくり出して固定を永続させようとする資本主義国家群や共産主義国家群の実態を知らねばならない。

リベルテール・サロン

リベルテールの会は毎週火曜日、水道橋近くの喫茶店終着駅でおこなわれてきた。ところが最近、店の方の都合で終着駅では会をひらけなくなってしまった。そこで暫定的に、今では近くのやはり喫茶店コージで火曜日、夜6時より会をおこなっている。



リベルテール 一部 100円

Le Libertaire 毎月一回15日発行

1974年10月15日発行 Vol. V, No 11

編集兼発行者 三浦精一

発行所 東京都練馬区大泉学園町2190

萩原晋太郎方

リベルテールの会

(振替東京133830番 三浦精一)